広報誌［うめ］

叶匠壽庵

イチヤクソウ｜撮影：丹澤愛継

君を待っていたんだ　いつか必ず会えるって
大事な秘密の目印を時々見失いそうになりながら
何度も何度も確かめた

心地よい風が吹いた
ゆらゆらとただ揺られている君を見ていたら、
生きているってことを思い出した
埋もれてしまいそうな世界の中で、小さな君がこんなに
しっかり存在している
その小さな体にはたくさんの力が詰まっていて、
きっと今、この世界で一番強い

雨や風に打たれながら少しずつ背を伸ばす
君が花を咲かすまで、私は君を守ろうとおもう

田中知香（たなかちか）
平和堂石山店

特別寄稿　烏梅10周年企画

「不言の妙」を聴く

総本山三井寺　長吏
福家俊彦

ふけ としひこ
1959年（昭和34年）、滋賀県大津市生まれ。立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。西洋哲学専攻。総本山三井寺（園城寺）執事長などを経て、2020年（令和2年）、第164代長吏に就任。現在、成安造形大学地域実践領域の招聘教授も勤める。

昨秋のこと、東京国立近代美術館で開催された「民藝の一〇〇年」展に行ってきた。

この展覧会は、民藝という民衆的工芸品に独自の美を見出した柳宗悦の没後60年を記念したもので、柳が訴えかけた正統的な美術史では評価されなかった美の思想について再認識を迫るものであった。しかも柳が批判の対象としてきた国立・近代・美術という概念を冠した会場で開催されたことは、ようやく時代が一回りして、柳が提示した「日本の姿」から普遍的な美の文化を見直すときが巡ってきたことを実感させるものであった。

さて、民藝といえば、陶磁器や漆器などの日用品を指す。日用品である限り、一定の用途に従った道具であり、何よりも有用性が優先され、無用の美は必要とされない。

では柳が発掘した民藝の美とは何か。それは日用品に美的細工を加えて道具としての商品価値を上げたものでは勿論ない。柳の指し示した美とは、道具としての有用性を極限まで突き詰めた結果、限界を突き破った地平ではじめて発現する美、数値化できる生産品としての規準を超えた純粋な美そのものであった。柳自身が「民藝館

の蒐集」で「物差しで計り切れる美しさは、高が知れていよう。少なくとも美しさの自由は、計量を越える」と述べたように、ファインアートとは別の道筋を辿って、人が生きるうえで大切にすべき美の価値を発見したのである。そして1936年、日本民藝館を開設し、出版を通じネットワークを広げ、新しい民藝の美を生み出す制作集団を組織して人々に伝えることを仕事とした。

　民藝館開設から80数年を経た現代、世はコンプライアンス、ガバナンス、サステナブルなど横文字が並ぶ一方、こうした誰もが否定しがたい概念を現実に適用するや、本来は実現するはずだった本質的なものが見失われ、ときに形骸化、矮小化していく。その結果、若者たちが生きづらい社会が広がりつつある。その最大の要因として、現代社会が「語りえないもの」や「目に見えないもの」の存在を無視、あるいは存在しないかのごとく社会の制度設計がなされているからである。いまや数値化できるもの、有用性の物差しで計れるものだけが考慮に値するものとして存在している。それが合理的であるとされる。かくして現代社会は、人がほんとうに生きるに値する無用の美の意義を共有することの困難さに直面している。

　かつて一休禅師は「心とはいかなるものを言ふならん墨絵に書きし松風の音」と詠じた。大自然から吹く風をモノトーンで描く、この風狂の世界をいかに表現するのか。また谷崎潤一郎も『陰翳礼讃』で花鳥風月をいちばん感じるのが厠であると書いた。柳もまたイギリスを代表する詩人で画家のウィリアム・ブレイクに傾倒し、日本に紹介した先駆者であった。そのブレイクの思想を象徴する詩「無垢の予兆」は次のようにはじまる。

一粒の砂にも世界を
一輪の野の花にも天国を見、
君の掌のうちに無限を
一時（ひととき）のうちに永遠を握る

　いずれも共通しているのは、耳目を閉じてこそ見えてくる別次元の眼差しが必要だということ。この眼差しなくしては新しい表現や創造への情熱も生まれないという確信である。その意味で計量化を超えた美の文化を発信することには意味がある。私自身も足下の近江に腰を据えて、日常ではこぼれ落ちてしまう大切なものをすくい上げ、価値のフェーズを変更する方法を提示していく必要を感じている。それは従来の「解説」ではだめで、新しい世界の見方をつくりだす試みでありたい。

現在、松岡正剛さん（左、右が筆者）と共に日本を再編集し、文化の「Another Real Style」を求めて発信するプロジェクト「近江ARS」の活動に取り組む。2021年12月には、そのキックオフとして「染め替えて近江大事」を開催。今秋には、叶 匠壽庵・寿長生の郷でイベントも予定

　1361年、寂室元光禅師は全国を行脚したのち71歳にして近江に移り、永源寺を創建する。京や鎌倉の名刹への招請を固辞しての近江入りだった。声望高く、参ずる者2000に及び「文教の地、近江に移る」と称された。その詩『山居』にいわく

名利を求めず貧を憂えず
隠処、山深うして俗塵に遠ざかる
歳晩、天寒うして誰か是れ友
梅花、月を帯びて一枝新たなり

　まさにいま、「寿長生（すない）の郷（さと）」に咲く梅が、月の光のもと新しい香りと輝きを放ち、近江から美と文化を語りだす「不言の妙」に耳を傾けたいと思う。

あも五〇周年記念

あもスイートメモリー

和菓子は日本古来、季節や行事の中で人々の暮らしに結び付いて受け継がれてきました。特にあんこ菓子は、大福、最中、たい焼き、団子など様々なカタチで存在します。そんなあんこのお菓子のひとつとして生まれたのが代表銘菓「あも」。皆さまに愛されて、2021年10月に50年を迎えることができました。

今回、50周年企画の中で募集したエッセイは、「あも」とのエピソードがたくさん詰まったものが寄せられました。泣きあり、笑いあり。胸に熱いものが込み上げるものばかり。こんなにも人の心と繋がっていることが嬉しく、また引き締まる思いで選考いたしました。

その入賞5作品を今号･次号で続けてご紹介いたします。

あもとワインのマリアージュ

宮城県　省子様

20代後半から毎年、冬のパリに出かけた私のスーツケースは決まって、新米・味噌・海苔とあもでいっぱいで、母は毎回「世界一オシャレな街に旅するというより、まるで季節の出稼ぎ労働者みたいね」と笑った。渡す相手は日本人相手のガイドをしていたフィリップ。幼少の頃、最初の親友が隣に住む日本人一家の男の子だったため、日本文化に馴染み、筋金入りの日本通になった。初の渡仏に不注意にもパスポートを落とし、泣きじゃくる私を親身に世話してくれて以来、日本食を届けたくて向かうようになった。ワインより水が高価な地で、一切お酒をたしまない彼の大好物が和菓子。特にあもは、日本人客よりお礼にとご馳走になったのをきっかけに日本の逸品となり、この乾いた空気の中、しっとりとした求肥とふくよかな小豆は最高！と、至福の時間を愛おしむように味わっていた。

あも旅行が突然終わりを告げたのは２０１５年11月。レストランを襲ったテロに巻き込まれ彼は亡くなった。ツアー客をかばって銃弾を受けたという。何ということだ。パリはテロに屈しない、今こそカフェへ出かけよう、勇気を持って語り合おう。フランス革命をやり遂げた誇りと強靭な魂。トリコロールに照らされたエッフェル塔の前で強くこぶしを握った。

今も1人パリへ行く。旅の友はあもだけ。あもとワインの絶妙なハーモニーを見たら、彼は粋なマリアージュだねと、ウインクするに違いない。スーツケースは軽くなったが、パリと日本の懸け橋になった彼への感謝、この地を訪れる人々の深く重厚な想いは未来へと引き継がれるのだ。

優秀賞

北国マダムの癒し

神奈川県　soy様

20年以上前。日常が戻り始める1月上旬、実家には毎年大量のあもが届いた。東北の町で家族経営の小さな呉服店を営み、正月には京都へ呉服を仕入れに行くのが恒例で、お得意様への贈り物も購入していた。

当時、インターネットは普及しておらず「お取り寄せ」という言葉もない頃。京都から運ばれた菓子はお客様にたいそう喜ばれた。それは「あものために着物を買ってくれているのではないか」という疑惑さえ浮上する熱狂ぶりで、父はそんなマダムたちの話を晩酌しながら教えてくれた。だが私は子ども時代、あんこが苦手で美味しさを理解できず、包み紙の裏で作る封筒の工作に熱中していた。

時は流れ、都会での生活が長くなり、あんこも味わえるようになった。何かのご褒美の日には、あも。食べながら思う。北国の冬は長く厳しい。きっと雪の毎日を生き抜くマダムのモチベーションだったに違いない。手が凍りそうな掃除や洗い物、腰が痛い雪かきも、贅沢な小豆の甘さを口にしたら一瞬で癒されたのではないか。あの喜ばれようは、平凡な日常を彩っていたに間違いない。

本業そっちのけに、あもを愛した父も数年前、天国へ旅立った。大切な人を亡くした経験がある方なら、「故人ならこんなとき何と言うだろう」と思うことがあろうが、あもに関しては故人の遺志は２００%引き継がれている。この菓子がつないでくれた思い出、絆、幸せはなんと20有余年の歳月を経て、とんでもない心の支えになっていることに気づく。

琵琶湖と人のものがたり《その1》

古代湖に育まれ生きる

たかはしけいいち
高橋啓一
滋賀県立琵琶湖博物館館長

満々と水を湛える琵琶湖。足元に打ち寄せるさざ波を見つめていると、自分が海辺にいるような錯覚に陥っていく。視線を上げて見渡せば、きらめく湖面の向こうには、幾重にもなった山波が見える。四季折々に装いを変え私たちを楽しませてくれる湖や山の風景は、ずっと昔から私たちと共にここにあったように思うが、真実はそうではない。目の前の湖も山も、かつてはここにはなかったのである。

琵琶湖が誕生したのは、４００万年以上も昔のことである。それも今ある場所から南に50㎞ほども離れた、現在の三重県伊賀市に。もちろん４００万年も昔に県や市などというものはなく、琵琶湖がどこにあろうとも誰も問題にはしない。そもそも問題だと思う人類が、そのころの日本列島には誰ひとりいなかったのである。琵琶湖は、世界に数少ない古代湖のひとつなのである。

琵琶湖が誕生した頃の日本列島は、大陸の東端から突き出た半島のような形であった。年間の平均気温は、地球温暖化が叫ばれる昨今よりもさらに暖かであったため、

琵琶湖の北西岸、マキノあたりの湖岸の風景

太古の琵琶湖のほとりにいた無数のゾウとサイの足跡化石
地層についた丸い模様や水たまりが足跡化石

太古の湖の周りには、今の日本ではみられない暖かい気候を好む植物も多く見られた。湖の大きさは、今の琵琶湖とは比べようもないほど小さく、浅かったが、湖底には、たくさんのタニシや貝たちが生きていた。そして、そのタニシや湖の小さな生き物たちを食べる大小さまざまなコイ科の魚たち、さらに、その魚たちを食べる体長３ｍほどのワニまでがいた豊かな生態系を持つ湖であった。湖のまわりには、肩の高さが４ｍ近くもある巨大なゾウやサイもいた。どうして、そのようなことがわかるのかといえば、これらの化石が、太古の湖の地層から発見されるからだ。

この最初にできた湖は、そこに流れ込む川が運んできた土砂によって50万年ほどで埋め立てられてしまうが、その北側には、断層の働きで新たな湖が誕生した。このようなことが繰り返されてのち、今から１００万年ほど前にようやく今の位置に琵琶湖ができ始めた。

この間、地球規模の気候変化や急峻になっていく周辺の山々の影響で、湖の中も周辺も環境は大きく変化し、生き物たちにも変化がみられた。たとえば、琵琶湖の誕生のころから森を作っていた大木のメタセコイアは、およそ１００万年前に消え、その森に生きていた日本固有のアケボノゾウも絶滅してしまった。幸い、このゾウの1体分の化石は、琵琶湖の東岸の多賀町から30年ほど前に発見され、今年、その重要性が認められて国の天然記念物に指定された。

琵琶湖博物館の展示の一部。右はじの骨格がアケボノゾウ

今では、琵琶湖のまわりでゾウやサイ、ワニなどを見ることはないが、こうした生き物たちは、何度となく訪れる気候変動の大きな波に耐えられず、数十万年前から数万年前に日本列島では絶滅してしまったのである。

一方、私たちの祖先が日本列島にやって来たのは、わずか４万年前のことだ。琵琶湖の歴史からみれば、１００分の１にしか過ぎない。人々は、この地にやってきて以来、琵琶湖とその周りの自然に畏敬の念を持ちながら、またそれを利用して風土にあった独自の文化を育み、つないできた。私たちは、文化は自分たちが作ったと思っているが、それは傲慢なのかもしれない。私たちの生活や文化は、私たちが知らない遠い過去から続く大地と生き物の物語の上に、その影響を受けながらなりたっているのである。これからも、謙虚な気持ちで琵琶湖に向き合いながら、古代湖との物語のつづきを末永く作っていきたいものである。

高橋啓一
専門は古生物学。最近は低山登山をしながらあちらこちらから琵琶湖や大地を眺めて楽しんでいる。現在、滋賀県立琵琶湖博物館館長。

残せるもの

生産部物流包装課　濱嶋かずみ

先日、息子が彼女を紹介したいと言ってきた。結婚するようだ。「彼女は料理できる子なの？」と聞くと彼は「大丈夫、昼弁当も作ってくれる」とあっさり答えた。私は料理も大してできずに結婚したので、大変だったその頃を思い出し、つい聞いてしまったのだ。

私には子どもが2人いる。仕事も2人が小さな頃からはじめ、家事との両立は料理下手な私にとってかなり辛い事だった。そんな中、料理のレシピを書き溜め、娘が嫁ぐ時に手渡した。今でも参考にしてくれているようで、時々帰ってきた時に手料理をふるまってくれる。今は私より遥かに上手い。

息子には何を渡してやれるのだろうか…。ある日、息子と話しているとこんなことを言われた。「僕は、お母さんが家事と仕事を一生懸命頑張る姿をずっと見てきた。学生だった12年間、皆勤出席できたのはお母さんのおかげだ。そんな学生生活が送れたからこそ、今、仕事に対して自信を持てる」と。子どもたちの前では弱音を吐かないと堪えた記憶がふと蘇り、思わず涙が出そうになる。素直に涙を流せばいいものを、またぐっと堪える。しかし、形で何かを残そうとする考えに固まっていた私にとって、とても嬉しい言葉だった。

これからは子どもたちもそれぞれ何かを残し、渡していく番だ。私も彼らと共に、残せるものをこれからも作っていこうと思う。

今こそ伝えたい舞台芸術の魅力《その1》

「芸術文化の灯（ひ）を消さない」を合言葉に

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール　副館長
山崎　薫（やまさきかおる）

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（以下「びわ湖ホール」）は1998年9月に開館、今年25年目を迎える劇場である。JR京都駅から琵琶湖線で約10分、大津駅から琵琶湖に向かって歩を進めると、やがてランドマークになっている白い大きな屋根が見えてくる。

春夏秋冬、どの季節も素晴らしい

オペラを上演する劇場は世界中に数多くあるが、自然豊かな山々に囲まれ琵琶湖のほとりに佇（たたず）むびわ湖ホールのような劇場はそうたくさんはないだろう。多くのお客様から、「この景色を望める場所にホールがあるのが素晴らしい！」というお声を頂戴する。メインロビーや大・中ホールのホワイエからは雄大な琵琶湖を見渡すことができ、初めてお越しいただいたお客様からは思わず歓声があがるほど。

晴れた日の午後には遠くにヨットが連なり、夕刻には湖面がオレンジ色に輝いていく……、そんな変化する風景を楽しめる。一方で、台風のような激しい雨や波しぶ

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール
●住　　所　滋賀県大津市打出浜15-1
●電話番号　077-523-7133（代表）

きが巻き上がるさまは、琵琶湖が生きていることを実感する瞬間だ。そして、雨が上がると大きな虹が架かって心も晴れやかになる。

建物の4階には、琵琶湖の南湖がほぼ見渡せる「展望プラザ」があり、どなたでも無料で利用が可能となっている。海外からのお客様を案内する際には、地図を示し、「今ご覧になっているのが南湖、あの橋（琵琶湖大橋）の奥に北湖が広がっています」と説明するのだが、「琵琶湖って本当に大きいんですね」とビックリされる。近隣の方が毎朝散歩の途中に深呼吸されるような清々しい場所なのである。

毎年、ゴールデンウィークに開催している「近江の春 びわ湖クラシック音楽祭」は、「ゆく春を近江の人と惜しみける」と詠んだ松尾芭蕉をも魅了した琵琶湖のほとりで、「近江の人もここを訪れる人も、ともに素敵な音楽を分かち合えたら」という思いから、音楽祭に「近江の春」を冠している。

たびたび訪れたであろう琵琶湖の風景を愛し、近江の人と親しんだ芭蕉は、今もびわ湖ホール近くの義仲寺に眠っている。

このホールをイタリアに持って帰りたい

びわ湖ホールの素晴らしさは風景だけではない。大・中・小の3つのホールを持つ劇場で、年間4、5本を自主制作するオペラを中心に、オーケストラ、バレエ、歌舞伎、狂言、演劇、室内楽など、あらゆるジャンルの舞台芸術を上演している。

特に関西初の四面舞台を備える大ホールの音響の素晴らしさは多くのアーティストから絶賛され、その中の一人、開館時、イタリア・ボローニャ歌劇場の引越公演で、ソプラノ歌手ミレッラ・フレーニが、音響とロケーションに感動し、「このホールをイタリアに持って帰りたい」と言った話は、今でも語り草になっている。

この他、厳しいオーディションで選ばれた「びわ湖ホール声楽アンサンブル」という劇場専属の16名からなる若手オペラ歌手を擁している。オペラや定期公演はもとより、クリスマスや七夕など、季節ごとに開催する無料のロビーコンサートは、赤ちゃん連れのご家族をはじめ、多くのお客様が楽しみにしてくださっている。

また小中学校で行う「学校巡回公演」「ふれあい音楽教

上 「近江の春 びわ湖クラシック音楽祭2019」琵琶湖を見渡せるメインロビーにて、びわ湖ホール声楽アンサンブルが熱唱
下 松尾芭蕉が眠る義仲寺（びわ湖ホールより徒歩約10分）

室」、県内の小学生らを招き、京都市交響楽団によるコンサートを鑑賞してもらう「びわ湖ホール 音楽会へ出かけよう！」（ホールの子事業）にも出演している。生の演奏を前のめりで聴き入っている子どもたちの様子を見ていると、やはり芸術文化の力は大きいと感じる。

新型コロナウイルス感染拡大の中で、「芸術文化は不要不急のもの」と言われた時期があったが、それまでずっと不登校だった子どもが、ホールの子事業に参加して、「音楽を聴いていると心がポカポカした」と、その後、登校できるようになったエピソードもある。

びわ湖ホールがオフィシャルスポンサー制度を設けた時、いち早く名乗りを上げてくださった叶 匠壽庵様とのご縁で、今回からリレー形式で音楽や舞台のことについて紹介させていただくことになった。これからも、皆さまの応援に勇気をいただきながら、「芸術文化の灯を消さない」を合言葉に舞台芸術をお届けしていきたい。

山﨑 薫
2017年4月、滋賀県より（公財）びわ湖芸術文化財団に出向。常務理事等を経て、2019年4月より現職。

地上の稲を結実させる稲妻（夫）。それは、豊穣をもたらせるものでもあります。自然が織りなすこの世界を、人は鋤・鍬をもって耕し、新しい道を切り開くために創造力を働かせます。叶匠壽庵人は「農工ひとつ」を合言葉に、百姓（おおみたから）として菓子づくりに接し、先を見据えたモノづくりを考えます。この印は1つひとつの命を大切にし、その持つ力を最大に発揮させ、生かしていく能力を拓いていくという意志を表現しています。

いよいよ夏を迎え、6月は氷を食したり代用に水無月を作ったりして暑気祓いや清めの神事が各地で行われます。ここ寿長生の郷でも涼感漂うお菓子が多く作られます。今回は、夏祭りでもよくみる粽を葛や寒天と果実を使って表現してみました。自家製の梅エキス、お世話になっている生産者の方々から提供していただいている逸品ばかりの夏のデザートです。氷を敷き詰めた桶に盛り付けて団扇の小皿に取り分けます。吊り花入れは、青竹の楊枝入れとして遊んでみました。

芝田冬樹

写真撮影　谷口菜穂子

編集候記

―寿長生の郷の山のテラスより―

記 池田典子

目の前には青く広がる梅林、初夏の風が通り抜ける場所で『烏梅』を振り返っています。創刊から、丸10年が経ちました。文明社会の大転換にあって、職業人として、市井人として、足元から考えよう。という主旨から生まれ、本拠地である滋賀の魅力を自分たちの目で見、直に触れ、紹介し続けてまいりました。

今号の10周年の特別寄稿には、「民藝」について触れていただきました。約100年前に柳宗悦らが創り出した美の概念。伝統的な手仕事による生活に密着した工芸品は「用の美」とも言われ、実用的なものにこそ真の美が宿ると称えました。

ありふれたモノから美しさを見出す。これは、ここ大石龍門の心象絵図の取り組みでも、目の前にある里山の暮らしの中からも発見することができ、私たちは常に美と隣り合わせなのだと感じます。

これからも、民藝に繋がる「近江の美」について気づき、感性を磨きたい。そう願い、滋賀県の文化に深く結びつく琵琶湖と、心を豊かにする湖国からの舞台芸術についても、ご紹介してまいります。

『烏梅』第40号 2022年夏

発行日 2022年6月1日
発行所 株式会社 叶匠寿庵
発行人 芝田冬樹
編集長 池田典子
編集人 丹澤愛継
酒井綾子
岡田千穂
吉上涼一
印刷所 佐川印刷株式会社
表紙・絵 河本万里子

株式会社 叶匠寿庵
本社・工場
〒520-2266
滋賀県大津市大石龍門4丁目2番1号
TEL 0120-257310（土日祝休業）
FAX 077-546-3133
HP https://kanou.com

絵

作家 河本万里子（かわもとまりこ）

日本画家。1975年、滋賀県高島市生まれ。
嵯峨美術短期大学（現 嵯峨美術大学）日本画専攻科終了。
江戸時代の円山応挙より京都の画壇に受け継がれてきた『写意（写生を通して物事の本質をとらえる）』の伝統に学び、生命のもつ瑞々しさを四季折々の植物を通して描く。
京都嵯峨芸術大学非常勤講師を経て、現在大阪にて作家活動中。

表紙絵 「清漣（せいれん）」

緑茂る夏の頃、一服の涼風を運び清楚な姿を見せる半夏生や未草。「琵琶湖周航の歌」発祥の地、滋賀の近江今津では歌にゆかりある未草が育てられています。未草は古来より日本に自生し、綺麗な水を好むそう。心潤す水辺の命、次世代にも伝えられたらと願います。

題

タイトル 『烏梅（うめ）』

近江も多く読まれている『万葉集』。万葉仮名では梅を「烏梅」と表記されています。近江の歴史と寿長生の郷の梅林を重ね合わせ、タイトルといたしました。

※39号の「近江の台所（朝宮茶）」で、3P3行目から5行目の農薬散布の記述に関し、読者に不安を与えるというご指摘をいただきました。市販のお茶はすべて、農林水産省の基準に沿って栽培されています。ここで改めてお知らせ申しあげるとともに、食に携わる企業として今後も研鑽を重ねてまいります。

広報誌『烏梅』の定期購読について

広報誌『烏梅』は6月・11月に発行いたします。定期購読をご希望の方は付属の葉書、叶匠壽庵HP、お電話にて承っております。

叶匠壽庵　烏梅　［検索］

※公募エッセイ「スイートメモリー」も随時募集中。詳しくはHPを参照。

叶匠壽庵
公式HP